

青ヶ島ミコの正月行事 —トシガミサマに関する覚え書き—

土 屋 久*

Resarch of event at New Year of female medium in Aogashima

Hisashi TSUCHIYA

1 はじめに

青ヶ島は、有人島として伊豆諸島の最南端に位置する世界的にも珍しい複式火山の島である。周囲は9 km、面積は5.98 km²程で、行政的には一島で一村をなしている（平成19年12月1日現在、人口193名）。

集落は、海面より切り立った崖が200 m程続く外輪山上に存在し、良港に恵まれないため、周りを豊かな漁場に囲まれているにもかかわらず漁業は振るわない。また、周囲に黒潮本流が流れ、そのため、わずか70 km北方の隣島八丈島への航海は困難を極め、これまでに多くの犠牲者を出してきた。

現在青ヶ島は、1日1便のヘリコプターと船（還住丸、日曜日運休）で八丈島と結ばれている。しかし、船の就航率は50%程で、海の荒れる冬場には1週間船が来ないことも珍しくない。また、梅雨時には霧のため、ヘリコプターも欠航することが多くなる。

こうした厳しい自然環境にあって、青ヶ島では巫俗が発達し、ミコや男性神役による祭祀集団が形成され、神事が執りおこなわれてきた。

筆者は、2004年11月より巫俗の調査のため青ヶ島に入り、現在（2008年1月）に至っている。今回の調査中（2008年1月2日－4日）、ミコによるトシガミサマの祭祀を見る機会に恵まれた。このトシガミサマの祭祀に関する報告は、これまでほとんどなされてこなかった。よって本稿は、青ヶ島の正月行事の記録として、ここに報告をおこなうものである。

2 青ヶ島のミコ

青ヶ島では、ミコケリのある人が主に閉経後、カミソーゼとよばれる成巫式を経てミコとなる。

* つちや ひさし 文教大学生生活科学研究所客員研究員

カミソーゼは1回で成功するとは限らず、成功するまで何度もおこなうこともある。カミソーゼに成功すると、ミコには自身を守護するカミがつくが、そのカミをオボシナサマという。このオボシナサマをミコは、ミバコ（御箱）に入れて祀ることとなる。以後、このオボシナサマ（守護神）がミコに協力して、シャマニックな能力を授けることとなるのである。

今回の調査で、トシガミサマの祭祀をおこなったミコは、現在（2008年1月）84歳になる女性AKで、40代の前半、2回のカミソーゼをうけ、オボシナサマがついたと見なされミコになったという。彼女のオボシナサマの主なもの²⁾カナヤマサマで、鍛冶屋のカミ、火のカミとされる。また、青ヶ島では、非常に力のあるカミとして畏れられてもいる。

彼女の生活史の詳細は別項に譲るとして、現在彼女は末の息子と同居し、長女夫婦の協力のもと民宿を経営している。

3 トシガミサマの祭り

先のミコAKによると、その年のカミサマをトシガミサマということであった³⁾。

元日にゴヘイを切り、香炉に線香を立てて毎朝ノリトを唱え、1月4日の朝まで祭りをおこなうという。線香の数は、3、5、7…と奇数本を立てるといふ。

写真1がトシガミサマの祭壇である。母屋の6畳程の部屋の床の間の前に、東の方角を向くように設けられており、祭壇中央の一升瓶に入っているゴヘイがトシガミサマである。ゴヘイは、AK自身が切ったとのことである。その前に鏡餅とみかんのお供え、線香を立てるための香炉とローソクがおかれている。左側の2つの香炉と2本のローソクは、ヤムネノカミサマの分であるという。ヤムネノカミサマとは、家の棟のカミだといふ。一階と二階で2セットとのことであった。本来は、二階の分は二階で祀るのであるが、体力的に二階で祀るのはキツイので、一階で祀っているとのことである。

また、写真2の「神きまい年の祭り」と書かれたものが、元旦から4日までトシガミサマへ毎



写真1

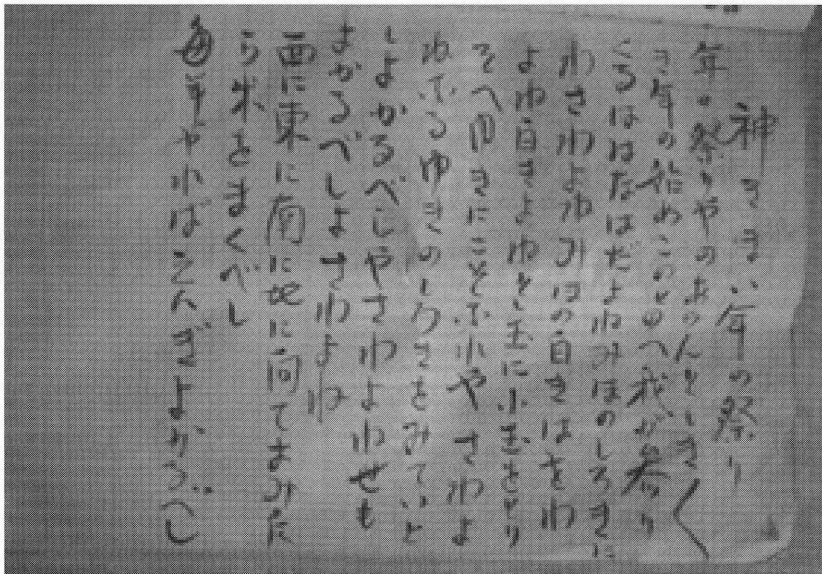


写真2

朝唱えるノリトである。写真は、AKの手書きのノートを撮影した⁴⁾。

ところで、1958年に青ヶ島を調査した坪井洋文が、元旦におこなわれるトシノマツリの報告をしている。そこで、彼は、「元旦にトシノマツリといってハカセ（青ヶ島の男性神役のことー土屋）を招いて祝ってもらう家もある。このとき次のような唄をうたう」〔蒲生・坪井・村武 1975：306〕と述べた後で、以下を採録している⁵⁾。

ふる雪の 白きを見れば
 としよかろうべし
 やさよね 日もよかろうべし
 白よねくれずば
 橋の下の赤鬼に くわしょうは
 おーよ（大魚）けんじゃらば
 橋の下の青鬼に くわしょうは [同上]

AKのノートに書かれた祝詞と坪井が採録した唄との関係は、今のところ不明であるが、雪の白さと白米の白を重ねて、新しい歳を祝福しようとするところに共通のモチーフをみることもできよう。

また、金山正好が採録した「八丈島系ト部傳承の祭詞祈願文」の中に「年の祭」がある〔金山 1985：1167－1180〕。この「祈願文」とAKが伝えるノリトは、一致する部分もあるが、どのような関係にあるかは解っていない。今後の研究の中で明らかにしていきたいと考える。

さて、1月4日になると、朝早くトシガミサマの祭壇は片付けられ、ゴヘイは、4畳半程の別室にあるミコの祭壇に移されることとなる。

4 ミコの祭壇

写真3が、新しいトシガミサマのゴヘイ（中央左）が飾られたミコの祭壇である。これから1年間、毎日この場所でゴヘイは拝まれることになる。また、4日の朝までここにあった今年のトシガミサマのゴヘイは、屋敷内の清浄なところに捨てられる。

ところで、トシガミサマとは直接関係ないが、AKの祭壇を説明しておこう。祭壇中央におかれているのは、大島の海岸にあった自然石であるという。表面に顔が描かれ（写真4.1参照）、裏には日付が入っている（写真4.2参照）。何故この石を祀っているのかとの筆者の問いに対して、AKは、人の性を木・火・土・金・水の五行に当てはめたとき、AK自身は水の性であるので、



写真3

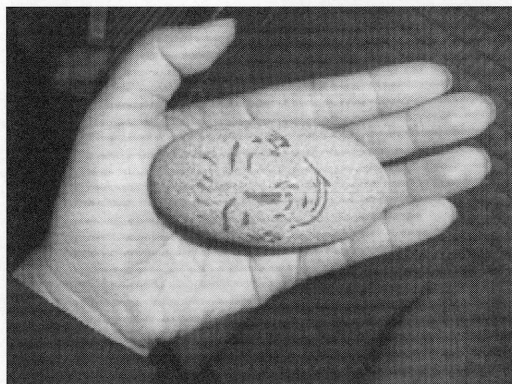


写真4.1

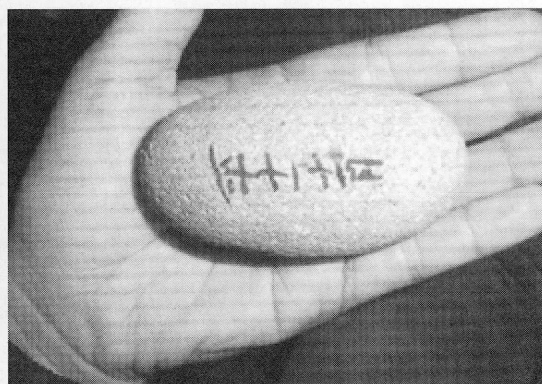


写真4.2

海のを祀ってあるとの答えであった。また、花瓶に「金山様」と書かれているのは、ミコのオボシナサマのカナヤマサマであり、先の自然石ともども、この場所で毎日拜んでいるとのことであった。また、蛇足ながら付け加えておくと、自然石の前には燭台と香炉が置かれているのがわかるが、青ヶ島では、ローソクと線香でカミに祈るのが一般的である⁶⁾。

5 おわりに

筆者はこれまで、青ヶ島の調査を、ミコやシャニンとよばれる宗教的職能者の生活史研究並びに神事への参与的観察を中心におこなってきた。しかし、今回、ミコのおこなうトシガミサマの祭祀をみるにおよび、青ヶ島の巫俗研究を進めるためには、島の年中行事の考察の必要性を感じている。青ヶ島では、現在、伝統的な行事が急速に無くなっており、調査が急がれる。

注

- 1) ミコケとは、ミコとなり得る気質、ある種の霊的素質のことをいう。詳しくは拙論 [土屋 2006] を参照。
- 2) オボシナサマは、1人のミコに1体とは限らず、何体ももつミコもいる。
- 3) AKとしては、その年の干支のカミをトシガミと理解しているようである。
- 4) B5版の大学ノートに筆ペン状のもので書かれている。最後に「西に東に南に北に向けよみたら米をまくべし 毎年やればえんぎよかるべし」と記されているが、こうした方法が実際におこなわれていたのかは、現時点では不明である。AKのノートには、他に21編のノリトが記されている。
- 5) 筆者が調査を始めた頃（2004年1月）には、既にハカセとよばれる、男性神役は存在しなかった。
- 6) ホトケに対しても線香は使われるが、その際、AKによると線香の数は偶数本でなければならないとのことであった。

[文献]

- 青ヶ島村教育委員会・青ヶ島村勢要覧編纂委員会 1984『青ヶ島の生活と文化』青ヶ島村役場
- 金山正好 1985「八丈島系ト部伝承祭祀祈願文」『東京都民俗芸能史』下巻 錦正社
- 蒲生正男・坪井洋文・村武精一 1975『伊豆諸島—世代・祭祀・村落—』未来社
- 小林亥一 1980『青ヶ島島史』青ヶ島村役場
- 1991「青ヶ島の信仰—島神信仰を中心として—」『海と列島文化第7巻 黒潮の道』小学館
- 近藤富蔵 1964-1976 『八丈實記1-7』緑地社
- 酒井卯作 1966「ミコをめぐる生活」『離島生活の研究』集英社
- 佐々木雄司 1967「我国における巫者 (Shaman) の研究」『精神神経学雑誌』第69巻第5号
- 土屋久 2006「八丈島における巫俗の一考察」『生活科学研究』第28集 文教大学
- 東京都教育委員会 1960『伊豆諸島文化財総合調査報告』第3,4分冊